

# 図書館だより

名古屋文理大学図書情報センター  
第12号 2003年10月



## 素晴らしき大学生活

図書情報センター長 奥村 純市 教授

本学の学生の皆さんに素晴らしい大学生活を送って欲しいと思っている一人として、私自身の体験的な反省とともに大学生活の理想像について述べてみます。何も堅苦しく考える必要はなく、どなたにでも実現可能な理想像であるので実行していただくと有り難いと思うし、また、実行した人からは将来「良いことを聞いた」と感謝されること請け合いです。

### 「良い友達を作ろう」

大学生活では高校時代と違って、より広範囲なところから色々な人達が集まっています。色々なバックグラウンドの違う人達と知り合い、お互い仲良くなって良い友達になることはその時にはあまり感じませんが、将来皆さんの大きな財産となり、人生を豊かにしてくれます。人それぞれに色々なものの考え方や見方があることが理解できるようになり、人間の幅が広がり、人間のスケールも大きくなります。大学卒業後何年かしてしばらくぶりに合うと、自分とは全く違う道を歩いていて、その話を聞くと、何か人生を2回やっているように体験するようなこともあるし、このように色々な情報を集める有力な手段の一つともなります。私自身も友人がこれだけ力になるとは思いませんでした。若いときよりもどンドンと、この友達の力は大きくなってきているように思います。

### 「色々なことにチャレンジし、自己発見に努めよう」

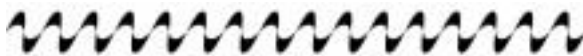
皆さんは自分自身の力を過小評価しておりませんか？ 多分誰も自分自身の力の本当のところを知らないと言うのが正しいと思います。自分自身の力を知るには、そのことにチャレンジしてみなければ何も分かりません。偏差値で評価できるのは記憶力と判断力だけです。人生をやっていくには最終的には総合力が必要です。その総合力とは何かと言えば、偏差値に使われる記憶力、判断力だけではだめで、想像力、組織構築力、実行力、忍耐力、情報力、あるいは財政力などありとあらゆるものが関係してきます。何事もチャレンジしてそのことを継続していくと、いつかは自分に気づかなかった力が自分自身に存在することに気付くものです。この自己発見がチャレンジした人へのご褒美です。誰も初めから「プロ」であったのではなく、皆このように「アマ」としてチャレンジし始めたのです。チャレンジして継続することにより自己の力を発見することになります。私の同級生の発展を見ても、大学生時代のチャレンジが基礎となった発展をしている人が多いのに気づきます。皆さんも大学生の時代にぜひ自己発見に努めていただきたい。自分の理想に向かって大いにチャレンジされることをお勧めします。



### 目次

素晴らしき大学生活	1
セミナー紹介	2-3
本の紹介	4-7
図書情報センターから	8

# セミナー紹介 - 第7回 -



このコーナーではゼミ担当の先生がたにゼミに関してコメントをいただいております。今回は、社会情報学科の伴野泰弘助教授からゼミの理念・目標について、情報文化学科の横田正恵助教授からゼミの内容について、それぞれ紹介していただきました。

## 伴野ゼミ(社会情報学科、専門演習、卒業研究)

### - なぜ、歴史を学ぶのか? -

社会情報学科 伴野 泰弘 助教授

学生の皆さんは、歴史というと、年表+暗記物、あるいは政治家など有名人物の成功話や偉人伝、はたまた時代劇など、連想されることはさまざまでしょう。一見するとこれらの連想には共通性がないように見えます。しかし、実は、「今、現に自分がこの時代にこの世の中に生きている」とことと過去の歴史とを、自身との関わりにおいて認識しないという点では共通しています。

あるいは、よく「歴史の教訓」というフレーズが語られることがあります。歴史がくり返すものであれば、教訓をくみ取り、失敗をしないために、過去を学ぶことは有効かもしれません。

たしかに、ある限られた局面において、一定の条件の下で、「教訓」を得ることができる場合があります。そのような学び方 例えば、戦国武将の戦略を企業経営に生かす等々 が、存在することも事実です。

しかし、それは、しょせん限られた局面、条件の下での有効性しかもちません。そして、現に自分が直面するあらゆる問題について、それを解決するための処方箋を過去の歴史に求めることは、できない相談です。

人は、大局的に見て解決できる問題しか、問題として認識しない、と言われます。ところが、自分という存在そのものを、それ自体として一度突きはなして見つめる、ことをしない人は、結局、自分がこの世の中であって、どのような問題に直面しているのか? 大局的に認識することは、できません。したがって、その問題の渦中であって、ただ、やみくもに試行錯誤をしているだけで、そこから解決に向けてのヒントを得ることは難しいでしょう。

伴野ゼミが目標とするのは、単に過去の事実を知ること、知識の量を増やすことではありません。今現在の自分を、歴史の物語の中に、自分自身の手で、置いてみることです。それは、さしあたり、自分に影響をあたえた条件、ことがら、存在を知ることから始まります。

直接、自分に大きな影響を与えたのは、たぶん身近にいる親などの家族でしょう。その親は、また自分の親から大きな影響を受けてきていることでしょう。と同時に、親たちはその時々々の社会状況の違いに直面しそれに対応して生きていかなばなりません。時代の違いが、人の生き方にも影響します。

したがって、歴史を学ぶとは、既にある書かれた事実を単に知るのではなく、自分という存在そのものを一度、歴史の物語の中の客観的な存在として、今ある自分自身から突きはなしてみることです。自分自身の手で、この作業は行わなければなりません。他人にはできないことです。自分がどのような存在なのか? それを追求することは、他者にはできません。

今、生きている自分には、世界のあらゆることが、ある意味では関わっているともいえます。その中から、何を選とり自分自身の歴史物語の場面設定をするのか? できるのか? そのための手伝いをするのが、伴野ゼミです。



# 横田研究室

ヒトなどの生物は、どのように『情報』を処理しているのでしょうか？

その解答を人類はまだ得ていません。そうした生物の情報処理のメカニズムを調べるために、どのようなことがなされており、それによって何が分かるのでしょうか。横田研究室では、特に、情報工学の立場から、生き物の情報処理メカニズムの解明に対しどのように貢献できるのか考えています。

具体的には..

- 3年生
  - ・ 生物に関する新しい知見を知るために、Scientific American, National Geographic などの文献を輪講しています
  - ・ 信号処理など解析の基礎となる手法を習得します
  - ・ 様々な動物を観察し、各動物の特性や生息環境を知るために、動物園や水族館に見学にてかけます
- 4年生
  - ・ 興味あるテーマを一人1つ決め、研究を行います
  - ・ 4年生の最後には、卒業研究発表会を実施します

現在、こんな卒業研究に取り組んでいます

- 裏声、怒鳴声などの音声信号を解析し、特徴を見つけ出す
- ニューラルネットワークを用いて株価を予測する
- 赤緑色覚異常の色の見え方を視覚心理実験から調べる
- 動物の鳴き声を音声合成する
- 色が集中力に与える影響を視覚心理実験から調べる
- 動物の鳴き声を周波数解析する
- 視野角と視力の関係を視覚心理実験から調べる
- ゲームのシーンに対する生体信号の挙動を解析する

などなど



S101 研究室で研究しています。

1～2年生でも興味ある人は見に来て下さいね。

H14年8月  
名古屋港水族館にて



# ✧ 本の紹介 ✧

『科学はいかにつくられたか

歴史からはいる科学哲学』

落合 洋文 著

ナカニシヤ出版 2003年

紹介者：情報文化学科 森 梅代 教授



化学と環境システム論を修め、比較システム論の立場から文明批評を展開している著者は、長年抱えていた「科学とは何か」、「科学は研究者個人にとってどんな意味を持つのか」という2つの疑問に答えようとしている。そのことが具体的に科学哲学の初歩を解説することになっている。本書の特徴は各章末に設けられた「対話」にあり、これが科学を志す若い読者へのメッセージとなり、各章の内容を理解する助けとなっている。

詳細は省くが各章のタイトルを下に示す。

1. 博物学から科学へ
2. イギリス古典経験論と近代科学
3. アイデア論争
4. ニュートンとビュッフォン

第1章は、18世紀の博物学隆盛期の自然哲学論争から説き起こし、ニュートンの「分析と総合の方法」と従来のアリストテレス等による「帰納・演繹の方法」とを対比し、科学の方法として仮説検証という手続きが認識されていく過程を、具体的な例を

通して論じており、第4章は【補論2 ドリーの哲学的波紋】で終わっている。特に、この数十年における科学技術の進歩はめざましく、私は、1997年にクローン羊ドリーの誕生が報じられたとき、人は神の領域にまで踏み込んでしまったのか、という思いを強くした記憶がある。科学と技術がともに刺激し合い新たな発見に繋がるということを単純に喜ぶことができない状況にあることも確かである。ここに科学哲学、思想・倫理の重要なテーマがある。

「情報文化学」研究の第1世代を任ずる著者は、情報文化学は単なるコンピュータサイエンスの応用ではなく、情報の意味論が必要であるとしている。これまでのようにITを工学の問題として扱うだけでは不十分であり、情報の意味や価値を問題にしなければならない。コンピュータサイエンスの研究者と文学、社会科学、歴史学などの異なる分野の研究者が問題意識を共有し、議論のための共通のプラットフォームを構成し、情報文化学に奥行きと広がりを持たせ、情報工学だけではない総合科学として成立させる基盤を構築しようというのである。

学生諸兄姉は、著者の「情報文化論」、「科学の方法」等の講義から、より平易に解説される「科学とは何か」について理解を深めることができるだろう。



## 『5分間でいい声になる本』



上野 直樹 著  
青春出版社 1999年  
紹介者：情報文化学科 吉田 友敬 講師



著者はあのSMA Pの中井君の声もトレーニングしたという、手練のボイストレーナーである。その著者の長年の経験の中から、ありとあらゆるアイデアを用いて、“モテ声”を実現するノウハウが盛り込まれている。著者によれば、「自分の声に自信がない」、「声は生まれつきのものだから変えようがない」と思っている人でも、自分が本来持っている「いい声」を簡単に引き出すことが可能である。

この本の中で、もっとも強調されているのは、まず、自分自身の持っているもっとも自然に出せる声、すなわち『地声』の良さを生かそう、ということである。『地声』とは、ふつうに会話しているときの『中間の高さ』の声である。多くの人は、人前でしゃべったり、歌ったりするとき、つい声のトーンを高くして、無理な発声で声を出すことが多い。これは『地声』に対して『ウラ声』というもので、特別な理由があるとき以外は、無個性な響きになるので、使わない方がいい。大切なのは、自分の『地声』で、心の中の感情を伝えることなのである。歌うときも、同じで、「歌うぞ！」と構えてしまうのではなく、「地声」で、堂々と歌えばいい。

このような立場から、著者は、様々な小道具を使っている練習法を提案している。それらを列挙してみると、割り箸、ハンガー、ティッシュ、つまようじ、ペットボトル、セロハンテープ、ラップ、等々である。何でこんなものが？と思われるようなものまで含まれるが、著者が多くのアイドルをデビューさせてきた過程で考案されたものではないかと思われる。

最後に、「カラオケが上手くなる鉄則十カ条」というものもあり、少し挙げてみると、「正しい発音にこだわることなかれ」、「感情をこめることなかれ」、「息は少しだけ吸うべし」、「マイクを味方につけるべし」など、結構意外なことも書かれている。

どの方法も、ふつうの音楽レッスンでは経験できないようなことばかりなので、興味のある読者は、是非試してみられることをお勧めする。

歌うにせよ、話すにせよ、まずは、大きくはっきり声を出すことが大切なのはいうまでもない。そのためには、第一声を発するまでの勇気と度胸がもっとも必要なことのように思う。まずは、トライしてみることである。



## 『バカの壁』



養老 孟司 著  
新潮新書 2003年

紹介者：健康栄養学科 照井 眞紀子 講師



「唯脳論」、「人間科学」、「からだを読む」などの著書で知られている著者は、解剖学者であるが、専門書のほか科学哲学から社会時評まで多数を著し、最近の書店の棚に多くの著書が陳列されている。そのひとつに著者の独白を文章化した『バカの壁』がある。

『話せばわかるは大嘘』ではじまる本書は、「『わかっている』という怖さ」「マニュアル人間」「the と a の違い」「イチローの秘密」「キレル脳」「オタクの脳」「東大のバカ学生」「オバサンは元気」「百姓の強さ」「人生は家康型」などのテーマで「共同体」「無意識」「身体」「個性」などの多様な角度から人生でぶつかる諸問題について、特に脳の仕組みから考えるとスッキリするとしてヒントを提示している。私たちはいつの間にかいろいろな「壁」に囲まれており、「わかっている」「知っている」と自分が知りたくないことについて自主的に情報を遮断してしまっている。これも1種の「バカの壁」で、与えられた情報に対する姿勢が問題だとして「都市化」「情報化」などのキーワードで一元論に陥りやすい人間の脳への危惧を説明するといったところである。いろいろ悩んだ時に「バカの壁」はだれにでもあるのだと思えば、気が楽になって問題が解決し、たとえ正解がないかもしれないが答えはあるとしている。



## 『博士の愛した数式』



小川 洋子 著  
新潮社 2003年

紹介者：健康栄養学科 照井 眞紀子 講師



『博士の愛した数式』は、交通事故で脳に回復不能のダメージを受け、記憶力を失った天才数学者と家政婦の私、阪神タイガースファンで10歳になる息子の三人のせつなくて、知的な至高の物語である。私と息子は、この数学者を博士とよび、博士は息子を頭のとっぺんが平らなことからルート( )と呼ぶ。数論専門の元大学教師だった博士の記憶の蓄積は1975年で終わっており、30年前に自分が見つけた定理は覚えているが新たな記憶は80分しか持たず、以前の記憶はどんどん消えていくという。

物語は、「ルート記号の中に数字をはめ込むとどんな魔法にかかるか、三人で試した日のことはよく覚えている。・・・」からはじまる。博士は、世界の成り立ちは数の言葉によって表

現できると信じている。「靴のサイズ」「誕生日」「電話番号」「江夏の背番号」など生活のなかの数字でのやりとりがなんともおもしろい。彼女らは巨大素数や数学の証明、無限を越える数学的観念などについて数多く教わっているが、博士が彼女らに求めたものは、正解だけでない。間違いを犯した時の方を喜び、そこから発生する新たな問題を一層喜んで正解を出せないときこそ、彼女らを褒めて自信を与えている。数学といえば、寒気がするほど嫌いだったり、苦手な人も多い。本書には、「素数」「階乗」「ルート」「フェルマーの最終定理」「ピタゴラスの定理」などと数学に関することばがいろいろ出てくるが、博士が数式を前にして発する驚嘆のため息や、美を讃える言葉、瞳の輝きは意味深いものがあり、教え方が上手で素直に頭に入っていく。三人のせつないほどのお互いの心配り、気働き、配慮などの描写にほっとしたり、クスッと笑いができると共に、難しいと思っている数学が博士のマジックでやさしく説かれ、納得させられる問題の解き方にどんどん吸い込まれてあっという間に読み終えていた。



**原稿募集中**


『図書館だより』では、読者の皆様からの原稿を随時募集しています。1 ページ全体に掲載をご希望の方は 1000～1300 字、半ページに掲載をご希望の方は 400～500 字が大体の目安となります。内容の前部分に、

名前	所属学科
学生の方は学籍番号	
本の標題	著者名
出版社名	出版年

を明記し、文書を保存されたフロッピーまたは印刷された用紙を、図書館カウンター（内線：362）までお持ちください。

採用された方には粗品を差し上げます。たくさんのご応募をお待ちしています。



## ～ 図書館の利用統計 ～

\* 貸出人数・貸出冊数状況（学科・学年別）

	4 月	5 月	6 月	7 月	8・9 月	合 計
情報文化 1 年	5( 12)	7( 13)	9( 12)	14( 30)	1( 3)	36( 70)
社会情報 1 年	14( 19)	12( 20)	12( 18)	9( 16)	2( 8)	49( 81)
健康栄養 1 年	16( 24)	39( 58)	33( 50)	26( 41)	3( 4)	117(177)
情報文化 2 年	7( 8)	8( 12)	8( 9)	7( 11)	0( 0)	30( 40)
社会情報 2 年	2( 2)	2( 5)	0( 0)	5( 6)	0( 0)	9( 13)
情報文化 3 年	6( 9)	7( 10)	9( 14)	14( 20)	1( 2)	37( 55)
社会情報 3 年	4( 5)	3( 3)	3( 4)	4( 6)	0( 0)	14( 18)
情報文化 4 年	6( 10)	13( 16)	10( 12)	17( 24)	2( 3)	48( 65)
社会情報 4 年	1( 1)	5( 6)	12( 20)	9( 15)	0( 0)	27( 42)
合 計	61( 90)	96(143)	96(139)	105(169)	9(20)	367(561)

( ) 内 貸出冊数

## ～ 図書情報センターから ～

10月1日より、図書館 OPAC 横にパソコン4台が設置されたのをご存知ですか？このパソコンはインターネットに接続されており、WEBブラウジングが可能な状態になっています。

また、キルデスク（個人閲覧机）には情報コンセントが設置されましたので、ノートパソコンを持ち込んでの自習やインターネットへの接続も可能になりました。

どちらも自由に利用できますので、図書の拠点として有効に活用して下さい。

今まで、紙媒体を使って発行してまいりました図書だよりですが、本学ホームページが一新されたのを機に、今回の12号からは大学ホームページで閲覧していただくことが可能となりました。（<http://www.nagoya-bunri.ac.jp/library/top.html>）これにより、もっと手軽に図書だよりをお読みいただけるものと信じております。今後ともよろしくお願いたします。

平成 15 年 10 月

編集：名古屋文理大学図書情報委員会

発行：名古屋文理大学図書情報センター

〒492-8520 稲沢市稲沢町前田 365

TEL(0587)23-2400 FAX(0587)21-2844

